

# 山崎郷土叢

NO. 134

令和2.2.15

山崎郷土研究会  
兵庫県宍粟市山崎町

大谷 司 郎

## 明治以降の山崎の年表(七)

大谷 司 郎

昭和四十年から四十九年の頃

明治以降の山崎を中心とした出来事を年表にして七回目になります。今回は、昭和四十年(一九六五)から昭和四十九年(一九七四)までを取り上げます。

元号が「平成」から「令和」に代わり、この年表シリーズの区切りを一応昭和末までと定めて山崎の記事を記していきます。本誌前号でも取り上げました『山崎新聞』にこの時期発行されたものが残っていたことも幸いし、記念誌などだけに頼るのでなく、当時の記事を出典資料として紹介する項目が増えてきました。

**自動車の急激な普及** 昭和四十年代は、その頃までに普及した二輪車の後を受け、自動車(中でも乗用車)の普及が目覚ましくなってきました(『運輸白書』)。それに合わせて、道路の拡幅や舗装の拡張、橋梁の新設・架け替えが各所で進みます。その上、中国高速自動車道の山崎インターチェンジの設置が決定するなど、相次いで道路網が整備されました。

さつき祭りが年々隆盛に 昭和四十一年六月五〜六日下村記念館で

### 目次

明治以降の山崎の年表(七)	大谷 司郎	1
空中写真と地図(その3)	清水 哲	4
山崎闇斎先生の心を継ぐ	鎌田 裕明	8
山崎歴史郷土館(四)	河本 雅規	11
最上山公園のもみじの魅力と歴史	竹内 克司	14
利便性の裏に潜むもの	伊藤 一郎	17
山崎町佛教会寺宝展の報告	加藤 昭彦	18
鳥取研修旅行記	坂本 忠彦	20
山崎町金谷博労垣内出土の大刀装具	片山 昭悟	22
会員・家族の文芸		24
事務局だより・総会のお知らせ		25
編集後記		25

「第七回播磨さつき展」が実施され、六千人の参観者があったと、『山崎新聞』第一八五二号に記しています。昭和三十五年から毎年六月上旬にさつきの展示会が行われてきました。昭和四十三年七月には山崎町町花が「さつき」に選定され、「さつきの町山崎」が広く知れ渡るとともに、町内の多くの家庭の庭先でさつきの盆栽が育てられるようにもなりました。

昭和四十九年の第一五回さつき祭りの記事を『山崎新聞』第二一九号で見ると、会場は下村記念館、山崎小学校運動場と五十波の宍粟郡花木センターで、三日間実施して、県内外から非常に多くの入場者があったと記されています。さつき祭りは昭和五十年代にかけて年々隆盛していきました。

明治以降の山崎の年表(13) 昭和40年～49年

西暦年	和歴	年	月	日	事 項	出 典 等
1965	昭和	40	10		中国自動車道山崎インターチェンジの設置が決定する。	議会第200回のあゆみ
1965	昭和	40	10		麦子林道(山崎町高下)が完成する。	議会第200回のあゆみ
1965	昭和	40	11	1	NHKテレビ(UHF)山崎中継局が川戸山に設置され開局される。	山崎新聞第1831号
1965	昭和	40	11	5	～7 第一回山崎町美術展が開催される。	山崎新聞第1833号
1965	昭和	40			この頃石炭・石油・ガスの需要に変わっていくようになり、薪・木炭の生産が激減していった。	山崎町史
1966	昭和	41	1		伊水幼稚園園舎が落成する。	議会第200回のあゆみ
1966	昭和	41	1	15	協同組合山崎町中央商店街の創立総会が開催される。	山崎新聞第1838号
1966	昭和	41	4	1	山崎・城下・川戸・宇原・神河・蔦沢・菅野・土万の8農協が合併し、山崎町農協が発足する。	育む、10年のあゆみ(しそ農協)
1966	昭和	41	4	1	山崎町観光協会が発足する。	山崎新聞第1841号
1966	昭和	41	4	7	菅野小学校体育館が落成する。	山崎新聞第1846号
1966	昭和	41	4		中学校から高等学校への進学率が53.6%となる。	山崎町史
1966	昭和	41	5	5	篠の丸頂上二代目一本松が選定される。	山崎新聞第1849号
1966	昭和	41	5	23	宍粟郡生活必需品組合が25周年記念大会を実施する。	山崎新聞第1851号
1966	昭和	41	6	5	～6 第7回播磨さつき展が下村記念館等で行われる。	山崎新聞第1852号
1966	昭和	41	7	1	山崎文化センター(青年婦人研修所、図書館、郷土館)が開館する。	山崎新聞第1854号
1966	昭和	41	7		城原中学校運動場が完成する。	議会第200回のあゆみ
1966	昭和	41	9	15	敬老の日が制定され祝日となり、各地で敬老行事が行われる。	山崎新聞第1861号
1966	昭和	41	9		山崎町本町にアーケードができる。	山崎新聞第1861号
1966	昭和	41	10		山崎町の鹿沢線が拡幅され、従来の本町西町線から県道が振り替えられる。	山崎新聞第1863号
1966	昭和	41	12	1	庄能、今宿で大火災が発生、高所にも飛火し、35棟が全半焼する。	山崎新聞第1870号
1967	昭和	42	2		戸原小学校体育館・神野幼稚園園舎が落成する。	議会第200回のあゆみ
1967	昭和	42	4		山崎町役場前と山田交差点に信号機が付く。	議会第200回のあゆみ
1967	昭和	42	5		博愛病院本館が完成する。	山崎新聞第1886号
1967	昭和	42	5		火葬場が上寺に完成する。	議会第200回のあゆみ
1967	昭和	42	6	4	～5 第8回さつき展が下村記念館等で行われる。	山崎新聞第1887号
1967	昭和	42	8		国道29号の完成祝賀会が行われる。	議会第200回のあゆみ
1967	昭和	42	9		第84回議会で議長に太田耕一氏、副議長に松下定吉氏が選任される。	議会第200回のあゆみ
1967	昭和	42	11		住民基本台帳制度が発足する。	議会第200回のあゆみ
1967	昭和	42	11	20	神姫バスがワンマンカー化を始める。	山崎新聞第1904号
1967	昭和	42	12		蔦沢中学校運動場が拡張される。	議会第200回のあゆみ
1968	昭和	43	4	7	明治維新百年記念で美国神社と烈士の追慕祭が行われる。	山崎新聞第1916号
1968	昭和	43	4		最上山児童公園が開園する。	議会第200回のあゆみ
1968	昭和	43	4	24	城下小学校体育館の落成式が行われる。	山崎新聞第1919号
1968	昭和	43	4	27	山崎町中央商店街にアーケードが完成し、竣工式が行われる。	山崎新聞第1918号
1968	昭和	43	5	19	立正信用組合が山陽信用組合と改称される。	山崎新聞第1921号
1968	昭和	43	6	2	～3 第9回さつき展が下村記念館等で行われる。	山崎新聞第1922号
1968	昭和	43	6	12	山崎幼稚園園舎落成式が行われる。	山崎新聞第1923号
1968	昭和	43	7	1	郵便番号制が始まる。	山崎新聞第1922号
1968	昭和	43	7		城下小学校プールが落成する。	議会第200回のあゆみ
1968	昭和	43	7	27	山崎町町花に「さつき」が選定される。	山崎町史
1968	昭和	43	8	11	電話機が自動式ダイヤル直通電話に切り替わる。	山崎新聞第1931号
1968	昭和	43	9		幼稚園が2年保育になる。	議会第200回のあゆみ
1968	昭和	43	9		播磨山崎電報電話局舎が落成する。	議会第200回のあゆみ
1968	昭和	43	9	15	山崎町内で90歳以上が35名になる。	山崎新聞第1932号
1968	昭和	43	10	1	山崎町五十波に養護老人ホームが開所する。	宍粟福祉のあゆみ
1968	昭和	43	10	3	山崎町民憲章の発表会が行われる。	山崎新聞第1937号
1968	昭和	43			与位の洞門大型自動車通行できるよう改修される。	広報しそNo.137号
1968	昭和	43			中国自動車道山崎町鹿沢以西のルート発表される。	山崎新聞第1952号
1969	昭和	44	4		都多幼稚園新園舎が落成する。	議会第200回のあゆみ
1969	昭和	44	5		関西電力山崎営業店の落成式が行われる。	山崎新聞第1955号
1969	昭和	44	5	23		

明治以降の山崎の年表(14) 昭和40年～49年

西暦年	和歴	年	月	日	事 項	出 典 等
1969	昭和	44	8	17	民放五社(毎日・関西・朝日・読売・サンテレビ)川戸山にUHF中継局完成し、映像鮮明になる。	山崎新聞第1964号
1969	昭和	44	9		第101回議会で議長に阪本敏雄氏、副議長に大友寅一氏が選任される。	議会第200回のあゆみ
1969	昭和	44	11	7	NEC日本電気が山崎町に工場進出決定する。	山崎新聞第1972号
1969	昭和	44	11	27	県道八鹿山崎線の富士野峠トンネル開通式が行われる。	山崎新聞第1973号
1969	昭和	44	12	9	山崎開齋生誕350年祭が行われる。	山崎新聞第1973号
1969	昭和	44	12	11	神戸銀行山崎支店の新店舗披露式が行われる。	山崎新聞第1975号
1970	昭和	45	3		河東小学校校舎が落成する。	議会第200回のあゆみ
1970	昭和	45	4		町道庄能上牧谷線が開通する。	議会第200回のあゆみ
1970	昭和	45	5	12	山崎町農協会館今宿に落成し、披露式が行われる。	山崎新聞第1989号
1970	昭和	45	6	6	兵庫県老人大学講座かしわの学園が開設される。	山崎町老人大学記念誌『足跡』総集編
1970	昭和	45	6	7	第11回さつき展が下村記念館等で行われる。	山崎新聞第1992号
1970	昭和	45	7	20	山崎町合併15周年記念式典が下村記念館で行われる。	広報やまさきNo.321
1970	昭和	45	7		鶴木橋が完成する。	議会第200回のあゆみ
1970	昭和	45	11		中国自動車道山崎インターチェンジの箇所発表される。	議会第200回のあゆみ
1970	昭和	45			国勢調査で山崎町の人口が25,258人となる。	四十七年の歴史(山崎町商工会)
1971	昭和	46	1		伊水小学校体育館が完成する。	議会第200回のあゆみ
1971	昭和	46	4	6	職業訓練センター落成式が行われる。	山崎新聞第2019号
1971	昭和	46	4		野田橋が完成する。	議会第200回のあゆみ
1971	昭和	46	8		町長選挙で安井淳三氏が当選、就任される。	議会第200回のあゆみ
1971	昭和	46	9		第113回議会で議長に阪本敏雄氏、副議長に大路修一氏が選任される。	議会第200回のあゆみ
1971	昭和	46	10		第1回山崎町民運動会が開催される。	議会第200回のあゆみ
1971	昭和	46	12		山崎町体育協会が発足する。	議会第200回のあゆみ
1972	昭和	47	1		宍粟郡広域行政協議会が発足する。	山崎新聞第2075号
1972	昭和	47	1	10	本会総会において宍粟郷土研究会が山崎郷土研究会に改称される。	山崎郷土会報第40号
1972	昭和	47	5		ごみ処理場が完成して全町での収集が開始される。	議会第200回のあゆみ
1972	昭和	47	6		戸原小、都多小、土万小、菅野小プールが完成する。	議会第200回のあゆみ
1972	昭和	47	9		第120回議会で議長に大久保光雄氏、副議長に中坪友男氏が選任される。	議会第200回のあゆみ
1972	昭和	47	9		町民スポーツセンターが完成する。	議会第200回のあゆみ
1972	昭和	47	10	10	第1回山崎町民運動会が実施される。	山崎新聞第2070号
1972	昭和	47	12	1	宍粟信用金庫が「西兵庫信用金庫」に名称変更される。	西兵庫信用金庫五十年史
1972	昭和	47	12	1	ジャスコが鹿沢に新装オープンする(3階建)。	山崎新聞2075号
1973	昭和	48	4		春安橋が完成する。	議会第200回のあゆみ
1973	昭和	48	4		山崎町高齢者教室が開設される。	山崎町老人大学記念誌『足跡』総集編
1973	昭和	48	6	2	～4 第14回さつき祭りが下村記念館等で行われる。人出を見込んで中国自動車道敷地も駐車場用地として利用する。	山崎新聞2088号
1973	昭和	48	7		山崎小学校校舎が完成する。	議会第200回のあゆみ
1973	昭和	48	7		河東小、神野小、伊水小プールが完成する。	議会第200回のあゆみ
1973	昭和	48	9		兵庫県林業試験場が完成する。	議会第200回のあゆみ
1973	昭和	48	10		山崎消防本部・山崎消防署が発足する。	議会第200回のあゆみ
1973	昭和	48	12	8	消防庁舎が町役場庁舎西に完成する。	山崎新聞第2105号
1974	昭和	49	1		山崎町老人福祉センターが鹿沢に完成する。	議会第200回のあゆみ
1974	昭和	49	2		城下幼稚園舎が増築される。	議会第200回のあゆみ
1974	昭和	49	2		町道三谷神谷線が完成する。	議会第200回のあゆみ
1974	昭和	49	4	22	河東小学校体育館の竣工式が行われる。	山崎新聞第2115号
1974	昭和	49	6	1	～3 第15回さつき祭りが下村記念館等で行われ、10万人の人出となる。	山崎新聞第2119号
1974	昭和	49	7		山崎小学校プールが完成する。	議会第200回のあゆみ

千手藤  
指度 47.3



## 空中写真と地図(その3)

清水 哲

### 一 はじめに

今の国道二九号線が出来る前に昔の小型バスは宍粟郡北部に行く場合どの道を通っていたのだろうか。地元の店の人に昔の山崎の様子を聞いていたとき、国道二九号線の三津の三差路から左に登る狭い道のことを教えられたのは二年前の年末だった。

たまたまその頃郷土会報一三〇号に載せて頂くために、三津と庄能の村役人が天保十二年に伊沢川を渡る橋の補強工事を藩に願い出た(山崎藩覚帳)ことを紹介する原稿を準備していた。その願い文には「三津の勸源寺山の石を切り出し」という文言があった。

### 二 三津の旧道

二〇一八年一月後半の温和な日、下三津のゲートボール場で尋ねると地元の方が、昔カンゲンジという寺があり隣保名にもなっていたと教えてくれた。「官弦寺」と書くことも後から知った。

何か手がかりをと考えているとき、宍粟市立図書館の郷土史コーナーで『三津観音堂の由来について』という冊子を見つけた。平成十九年に三津老人会が記したものとある。冒頭を引用する。

「現在の国道二九号線は永い年月の工事を経て、大正八年頃に完成している。その後三津地区内は二回程拡幅が行なわれて現在の国道になっている(当初は二十号線)。それまでは、観音堂前の上道(うえみち)が本道であった。上道は川西道と言われていた。

寛永八年(一六三一年)三三七五年前)に完成している。へ中略)上道がついたことにより一宮町(繁盛)の富士野銀山が栄えていたこともあり荷物運搬も盛んになった。又播磨一宮や奥筋への参詣道として欠かせない重要なものとなり、道がついた事により人々の往来も盛んになった。」

後半部分は『山崎町』史七二四〜五頁を参考にしたと思われる、簡潔に記されている。

思い立って三月後半の穏やかな日に、ゴダイやカワベより約5〜6m高いところにある道を観音堂から北に向かって歩いた。幅は約2m余、二九号線沿いの田畑・宅地・造成工事の土地を見下ろす感じである。人家の集中している上三津で谷沿いになると「武太神社」の鳥居と屋台の倉庫が見えてきた。左手の段丘には耕作地の跡が見える。

### 三 田井の旧道

以前から、国道二九号線と並行して山側に道があることは気がついており、いつか歩いてみたいと思っていた。三津旧道を歩いた翌四月上旬の日曜日、神河橋北の広い所に車を止め、神野小学校の北側から山沿いの道に入り奥へと歩いた。二九号線やフクシン金属工業が少し下に見える。途中で会った地元の人によれば、昔ここを小さなバスが走ったと、お年寄りから聞いたそうだ。

この旧道は、今は「よいたいトンネル」出口で途切れているが、北の川沿いまで続いており、その先に与位の洞門があった。別の日に五十波の旧道をさがしてみたが、よくわからなかった。



#### 四 明治・大正・昭和の地図

明治以降に地方が作成したこの地域の詳しい地図はどこに残っているのかわからず、頼りは国作成の地図。『龍野市史』や『太子町史』等には明治三十年（一八九七）に国が発行した二万分の一の地図を編集したものが付図として添えられている。国土地理院に尋ねると、山崎以北は二万分の一の地図はなく五万分の一のものが最古の地図とのこと。そこで大日本帝国（参謀本部）陸地測量部が明治三十年に測量し、同三十二年（一八九九）に製版した地図「山崎」の謄本を国土地理院から入手した。左はその一部である。

① 左の地図を虫眼鏡で見てもらうと、因幡街道は東通りから北へ伸び、三津旧道を経て五十波は川沿いに、田井は山沿いの旧道を通っている。これが明治十八年（一八八五）に制定された、東京

写真①  
明治30年測量、明治32年(1899)  
製版の一番古い地図(5万分の1)  
(元の地図の範囲は北の端は上野  
や福中、東の端は寺前である)



写真②  
昭和7年(1932)に修正の地図



鳥取の国道二二号線である（明治国道）。制定当初は姫路・千本・平福・智頭・鳥取ルートだったが翌十九年に林田・山崎・若桜・鳥取ルートにかわった。そして大正九年（一九二〇）施行の道路法（大正国道）で名称が国道二〇号とかわったが、その道がこの幅広く書かれた道である。

② 三津の冊子にある「大正八年頃に完成した」二〇号線は、右の昭和七年（一九三二）修正の地図ではつきりとあらわれる。田井の旧道はそのままであるが、昭和二十二年修正の地図では平地に直線的な道路が書かれている。

学校のマークは昭和七年応急修正版から急に増える。また山崎市街地と揖保川の間に見える工場のマークは大正七年（一九一八）にできた郡是の工場であろう。明治三十二年の地図には、横須に水車小屋のマークがある。揚水用と米つき用の水車小屋があったようだ。

③ 左は昭和二十五年（一九五〇）応急修正の地図である。昭和三十四年に印刷されているが、発行者は「建設省地理調査所」となっている（戦後は内務省地理調査所、昭和三十五年からは建設省国土地理院、現在は「国土交通省国土地理院」）。

五万分の一の地図で六粟全体を見るためには、「山崎」だけでなく、南は「龍野」、西は「佐用」、北は「大屋市場」「坂根」と5枚必要である。山崎市街地のすぐ南が別の地図に属するのが不便である。この地図の欄外には、昭和二十二年の空中写真と昭和二十四年の現地調査を応急修正の資料としたこと、行政区画は昭和三十四年七月現在のもの、と書かれている。昭和三十年（一九五五）の合併により神野村・河東村などの文字は消え、五十波と中にあつた村役場



写真③  
昭和25年(1950)応急修正、昭和34年印刷

を示す○の記号が消えている。

山崎市街地を東西に貫く今の広い道路はまだないが、門前加生には菅野に向けて幅広い道が出来たようだ。田井には新しい道が出来、山沿いの道は旧道になっている。尚、大きな神社でも鳥居の記号が書かれていないケースがあり、注意を要する。

## 五 昭和三十年の合併

図書館の郷土史コーナーに「山崎町全図」（昭和三十一年二月）

### 山崎町全圖

と称する地図がある（作成者の記載なし）。

山崎町を時計回りに、新宮

町・三日月町・南光町・千種

村・西谷村・神戸村・富栖村・

安師村が囲んでいる。『兵庫

県市町村合併史 下巻』によ

れば昭和三十〇三十一頃合

併が進んでおり、山崎町の周

りの町村の名前が図のように

なる期間は、昭和三十年（一

九五五）七月二十日の山崎町

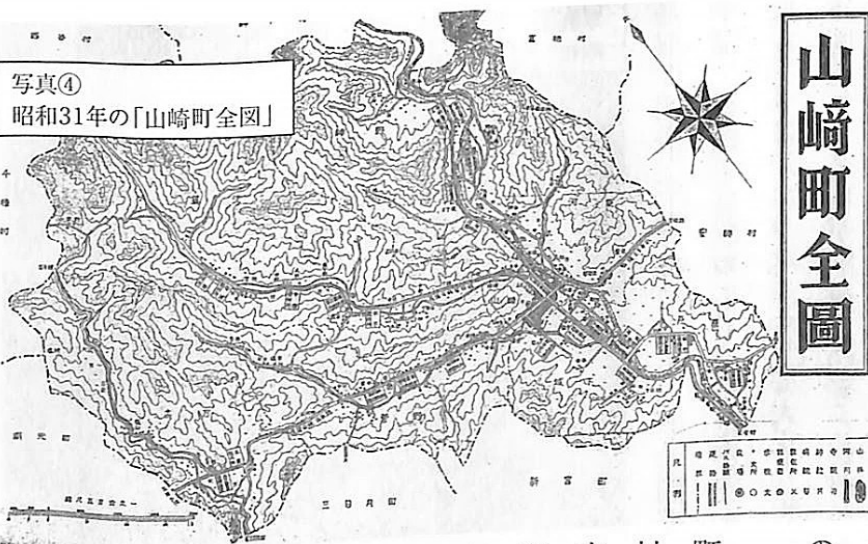
大合併から、一宮町の第一次

合併により神戸村がなくなる

昭和三十一年三月末までとな

る。昭和二十七年（一九五二）

写真④  
昭和31年の「山崎町全図」



の道路法改正（昭和国道）により名称が二九号線とかわりこの地図にもその名が記されている。

## 六 まとめ

### （一）昔のバスが走った道

明治以降も交通手段としては徒歩が中心であったが、明治後半から人力車が使われ、大正時代に自転車普及した。乗合自動車（バス）がこの地域に路線を持ち運行されるのは大正時代になってからのようだ。十人ほどが乗れる小型バスが走れるような道は、まずまずの幅と橋のある国道Ⅱ因幡街道しかない。

この道幅について『安富町史』・『一宮町史』・『波賀町誌』の記述をみると、約5・3mから1・5mまでと差がある。計測する主体・方法・場所・時期の違いは否めない。山崎辺りでは、十七世紀後半の城絵図では山田町の道幅が3間（5・4m）となっている。町筋を離れた三津・田井の旧道は今の2mと変わらなかっただろう。乗合自動車の初期について、『山崎町史』では、大正七年に姫路自動車が姫路山崎間を、龍山自動車が龍野山崎間を運行したとする。『波賀町誌』は、山陽自動車による山崎上野間の運行開始は大正八年（一九一九）五月二十八日と明記し、さらに道のでこぼこや荷馬車（馬力）との関係などを書いている。

さて、三津の冊子に書かれた大正八年頃完成の新しい道は、翌九年から名称が二十号線にかわる国道にすぐ格上げされたのだろうか。丁度その時期に山崎上野間のバス運行が始まっている。東和通りを抜けたバスは上道と下の新道のどちらを通ったのか。記録が見つ

らなければ言い伝えに頼るほかないが、まだ確証を得ていない。

昭和も三十年頃までの話だが、三浦精肉店の向かいにあった神姫バスターミナルから蔦沢に行くバスは、今の中央商店街を通り、旧鉄屋酒店の角を屋根瓦すれすれに左折しまた右折し、大歳神社の通りを真っ直ぐ生谷橋まで通ったそう。昭和十九年生まれの人が小学校五年生頃の話として教えてくれた。今の生谷橋は昭和三十一年（一九五六）三月に完成し供用開始となった。中川医院の前の広い新道をバスが走り出したのはその時からであろう。

### （二）道と集落

ときどき、「昔からの道は、山裾や堤防を通ることが多いが、これは人々が農地を大切にしたからである」という趣旨の文章を見ることがある。堤防上はともかく、旧来の道が山裾にあるのはそこが水田の場所より高く氾濫時にも浸水することがないからだ。大水の度に浸かるところを避けて人は家と道をつくる。昔からの集落は、例えば三津の場合、下三津は段丘・中三津は自然堤防・上三津は小扇状地に立地している。五十波や田井も同じだろうし、杉ヶ瀬の母栖谷川沿いに家が多いのも同じと思う。堤防や用水路が出来、川をコントロールできて、はじめて広い水田地帯もできたと思う。

私の郷里は、瀬戸内の遠浅の海を江戸時代に堤防を築き干拓した村である。もの心ついた頃からある幅の広い道とは別に、山裾に等高線をたどるようなグネグネした道があった。あれこそ干拓する前から海が満潮の時も、そして干拓後に堤防が決壊しても、海水に浸からず通れる道だったろう。大きな堤防が出来て安全だと思いはじめの前は、道も家も少し高い所にあっただろう。



# 山崎闇齋先生の心を継ぐ

## ― 生誕四〇〇年を期して ―

鎌田裕明

はじめに

三十一年続いた平成が令和と改元され、「人びとが美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」ようにとの願いを込めた年が始まりました。この年が闇齋先生生誕四〇〇年にあたることは、闇齋先生に学ぼうとしている私たちにとっては次のような意味があります。

第一は日本の歴史にとりわけ強い関心を持っていた闇齋先生の志を継ぐことです。国のあり方について思いをめぐらせ、国際社会の中で世界のために日本がどのような貢献が出来るか、ということ。第二は人間関係を、例えば親子、兄弟、夫婦、友達の間で、仁、義、礼、智を基底にどう取り結んでいくか、ということ。第三は右の二つを踏まえて、地域の中で「闇齋先生の心をどう継いでいくか」ということ。これらのことに答えるために山崎闇齋研究会の歴史を概観し、学んできたことを確かめ、あわせて「闇齋先生生誕400年記念」の会に触れたい。

### 一 研究会の歴史

以下個々の事柄の持つ意味や深みを懐かしく想起しながら、未来へ繋がっていくものに思いを致し、歴史を回顧します。

天地には、春・夏・秋・冬の違いがあります。春になると、すべてのものが生き生きと成長し、陽に輝きます。夏は更に茂り、大きくなります。秋はゆたかな稔りの時、しかし黄落の時が静かにすすん

でいます。冬は狭雑する虚なるものを捨離する時。万物はこの季節、本来の最も基本の形に還ります。原点を確認し、ここから多様で多彩な次の季節を迎えるのです。自然の中で暮らす人間にも四季の巡りは一切遅滞なく正確です。自然の巡りや変転の基調は変わっていません。人間に内在する徳性も同様に不変です。「人間は、存在のはじめに於いて、仁、義、礼、智という性を与えられている<sup>①</sup>」ということ。これを私たちの立ち位置としているのです。

#### (一) 講演会の時代

遡ると昭和三七（一九六二）年、山崎町の主催で東京大学教授阿部吉雄の『山崎闇齋先生の学問』を演題とする講演会を開催。以後、下御霊神社宮司出雲路敬和、姫路学院女子短期大学教授島田清、岡田武彦九州大学名誉教授、牛尾弘孝大分大学教授、坂田新文教大学教授、加地伸行大阪大学名誉教授、植村和秀京都産業大学教授、田尻祐一郎文教大学教授と、錚錚たる斯界の第一人者を招聘した講演会を開催しました。

#### (二) 輪読会中心の時代

講演会は本條衛闇齋研究会名誉会長が会長時代、氏の人脈とお人柄によって地域の協賛を得ながら全てが盛会裡に行われました。私が会長を継ぎ（二〇一三年）、高井淳氏が事務局長となつてからは、主として輪読会を原則毎月の日曜日と定め実施してきました。

●岡田武彦『山崎闇齋』（二〇〇二年に読む、以下同じ。出版社は略しました）●牛尾弘孝『若林強齋』（二〇〇三）、石田和夫『浅見綱齋』（々）、●牛尾弘孝『山崎闇齋』（二〇〇三）、朴鴻圭『山崎闇齋の政治理念』（々）、●菅野覚明『神道の逆襲』（二〇〇四）、

小室直樹『論理の方法』（タ）●植村秀和『丸山真男と平泉澄』（二

〇〇五）、●岡田武彦『ヒトは躰で人となる』（二〇〇六）、田尻

祐一郎『山崎闇齋の世界』（タ）、丸山真男『闇齋学と崎門学派』

再読（タ）、●山崎闇齋『敬齋箴講義』、『大学垂加先生講義』（二

〇〇八）、●脇田治『懷徳堂とその人びと』（二〇一〇）、●田尻

祐一郎『江戸の思想史』（二〇一一）、●田尻祐一郎『二つの理』

（二〇一二）、加地伸行『祖父の語る「こころ」の物語』（タ）、

田尻祐一郎『荻生徂徠』タ）、●田尻祐一郎『山崎闇齋の世界』再

読（二〇一三）、●牛尾弘孝『山崎闇齋』再読（二〇一四）、●澤

井啓一『山崎闇齋』（二〇一五、一六）、●宇野哲人訳注『大学』

再読（二〇一七）

二〇一八年以降は福原謙七の『教憲衍義』、『子爵品川弥二郎閣

下宛書簡』の講読と研究及び会員の原稿検討をしました。『教憲衍

義』では闇齋先生を「先輩」とし「神道の奥義をきわめた一大豪傑」

と賛辞を呈している文②に出会い一次資料読解の醍醐味を味わった

ことでした。

二 キーワードに見る闇齋先生の考え

（一）「それ敬の一字は、儒学の始めを成し終わりをなすの工夫に

して、その来たること久遠なり」③闇齋先生の講義の冒頭、明解さ

に思わず爽快になります。

「人の一身五倫備わりて、身に主たるは心なり。この故に心敬すれ

ば、即ち一身修まりて五倫明らかなり。」④この文の論理的な展開

は反論の余地がなく精緻です。これはカントが『実践理性批判』で

行為の格率の定言命題⑤の迫力を越えているようにも思われるので

す。

（二）「生きていくことは楽しいことだ」⑥と田尻祐一郎先生は儒

学について述べています。実際、私たちは生病老死や苦の大海の中

でのみ生きるのではなく、人と人とのつながりの中で、親、兄弟、

夫婦、友達、職場や地域の人たちとの人間関係を取り結んで生きて

いるように思います。先生は、「もの」や「事」に囚われ、愛憎に

執着する現実があるにかかわらず、それを「楽しい」ものと肯定す

るところから儒教は出発している、と説いています。ここには大い

なる生の肯定があります。

（三）同じく田尻先生です。「自己中心的な自己を越えたより深い

自己」⑦の認識。今日「ジコチュウ」という虫が人びとを毒してい

ると言われだしてから久しい。田尻氏は、闇齋が普遍の「理」を信

じ、なおその上で「心神」を祀り以て自己を越える契機としてい

と述べています。

（四）「闇齋は將軍権力を相対化する『神代』の『古』を創出した。

それは、一方で自発した倭の世界でありながら、他方で『理』を实

現した普遍性を有する理念の世界であった。」⑧ここで述べられて

いる闇齋が「理念」において將軍に對峙しようとしたという認識は、

私には衝撃でした。著者朴鴻圭は高麗大学を経て東京大学大学院で

学び、丸山真男と闇齋先生をイメージとして重ねながら学位論文を

執筆、これは東大出版会から『山崎闇齋の政治理念』として出版さ

れました。

三 つながりとふれあいの場としての闇齋神社

ここで文化や歴史がつくられていく

毎年、明るく、いっぱい咲く桜の下で、暖かい春風に包まれてひとときを過ごすことが出来るのは有り難いことです。子どもからお年寄りまで、のんびりと豊かな気持ちでおでんや焼きそばを頂き、大人はふるまい酒に酔い、子どもたちはビンゴに運とつきを賭けて熱中します。私たちは、お互いにフーストネームで名前を呼び合います。それはずーと前のおじいちゃんや、おばあちゃんの時からのおふれあいや心のつながりを確かめるときでもありました。

子ども神輿では、異なった年齢の子どもたちが互いに役割分担をし、持ち味に応じた貢献をし、神輿の巡行を自分たちのこととして成功させます。

これらの風景が人びとの共感と感謝と、喜びに満ちて成り立っていく背後には、各会長さんや役員、そして関係の皆さんの無私の役割分担とその遂行があります。それは改まってボランティアというようなものではなく、二代も三代も前から、格別意識されるのではなく、無造作に、当然のことのように、地域で、家で、それぞれの集団で引きつがれてきたものです。それは地域の文化であり、同時に歴史とも呼ばれるべきものです。

西鹿沢にゆかりの闇斎先生が存在し、三〇〇年以上前に活躍し、歴史にその事績が刻まれていること。その闇斎先生について多くを知り、学ぶべき事を学び、それを行うこと。人間の歴史が作られ、発展してきたのはまさにこのような文化的な営みが積み重ねられてきたことに由るのです。地域に祭りやとんどの行事があり、それを受け継ぎ、担っていく役員がいること、世代を超えて受け継ぎ、発展させていく次の世代がいること、これが共同体の存続、そこで暮

らす人びとの存続と繁栄に繋がり、それが歴史をつくっていくのです。

おわりに

「闇斎先生の心を継ぐ」ことが私たち山崎闇斎研究会員の願いです。そのための一歩となれば、との思いで拙文を記しました。私たちは「豊かで巨大な闇斎学の森」の前に佇立（ちよりつ）しているだけかもしれません。それは久保隆司先生等による『山崎闇斎先行研究文献目録』⑨に記された膨大な数の文献からも容易に理解されることです。足りないところは研究会のメンバーとともに研鑽を積んでいきたいと思っています。

【注】

①島田慶次「大学・中庸」朝日新聞社昭和四三年版本二頁。他に、赤塚忠「大学・中庸」明治書院平成十九年版一〇七頁では「性は人の天に得るところの理なり（孟子）」を引用して拙論と同趣の論述をしている。

②福原謙七「教憲衍義」私立靖献義塾明治二十六年版五五丁（国立国会図書館デジタルコレクション所蔵）

③山崎闇斎『闇斎先生講説』岩波日本思想大系（三二巻）、一九八〇年版八〇頁

④山崎闇斎「敬斎箴序」、『前掲書（三一巻）』九七頁

⑤カント『実践理性批判』岩波文庫昭和三二年版三一、五一頁

⑥田尻祐一郎『山崎闇斎の世界』ペリカン社二〇〇六年版三頁

⑦田尻祐一郎『前掲』二四三頁

⑧朴鴻圭『山崎闇斎の政治理念』東京大学出版会二〇〇二年版一七七、二二三頁

⑨久保隆司、大貫大樹、丹一信『山崎闇斎先行研究文献目録』『藝林』第六八巻第一号三二〇～三四三頁



## 「山崎歴史郷土館」(四)

◎郷土館の展示物を見て山崎の歴史を想像してみませんか

河本 雅 視

山崎歴史郷土館展示物を見ながら山崎の歴史を訪ねてみましょう。今回は室町時代中心の展示物のご紹介をします。

一、室町時代を訪ねる(一三三三～一五七三)

室町時代はどんな時代かを調べますと、鎌倉幕府滅亡後であり、世の中が乱れに乱れた下剋上の時代であります。しかし一方では文化面、生活様式、そして貨幣経済の浸透とともに商工業の発達が見られる時代でもあります。

まず、鎌倉幕府が滅び、建武元年(一二三四)、後醍醐天皇により建武の新政がなされたが失敗に終わり、南北朝時代が始まります。それに加へ足利尊氏によって室町幕府が開かれましたが、観応の擾乱といわれる、尊氏と弟直義との対立、そして後醍醐天皇の南朝方も含む三つ巴の騒乱へと発展し、世の中は乱れ、有力守護や、地方武士も巻き込まれていき、この時に多くの武士が増えていき、この時有力な武士がより一層勢力を蓄えていきました。鎌倉時代に発生した悪党などもこの中に含まれ、平安時代に荘園化していった土地も、これらの新しい勢力によって、荘園も公領も侵略されるといって大変な時代になりました。そしてまた下剋上の時代へと移っていきま

しかし、また一方、文化面では足利義満が金閣寺を、義政が銀閣寺を建造するなど、そしてまたお茶やお花、能や狂言などがこの時代から始まり、住まいについても、一戸建て、間仕切り、畳の部屋なども室町時代から始まり、その他食生活、衣生活でも大きく変わったようです。

特に農村での結合という意識の変化ですが、武士の荘園侵略などにより領主の支配力が弱まるなかで、農民たちは農業用水路や灌漑用水路の確保など、身近な生活の必要性から、名主層(土豪・地主)と一般農民層(自作農・自小作農)などの結合により、村落共同体が形成され、郷村が出来ました。つまり荘園から郷村制へと変わっていきました。

宍粟では室町時代に柏野・比地・石保・高家・土方・伊和・御方・安志・千草の九郷があったことが『山崎町史』に記載されています。

二、展示物から考えられる室町時代の山崎

山崎歴史郷土館の室町時代の展示物を見ますと、篠の丸城跡の出土遺物や、上空からのレーザー測量による地形図が見られます。また、長水城や五十波構(かまえ)跡から出土した屋根平瓦類、そして、昭和三十五年(一九六〇)、山崎町岸田(神河中学校講堂前)から出土した壺とその中に入っていた古銭(渡来銭)が展示されています。これらの展示物から室町時代の山崎を想像してみましょう。

### ① 篠の丸城

山崎の室町時代はと言えば篠の丸城・長水城ですが、建武三年（一三三六）征夷大將軍になった足利尊氏は、赤松氏の戦功を賞して赤松則村（円心）を播磨国の守護職に任じました。

赤松氏と宍粟とは深い関係があり、篠の丸城については、鎌倉時代の終わりころ、釜内小次郎範春の名も見えますが定かでない、築城は室町時代の貞和年間（一三四五～一三五〇）赤松則村の次男貞範が交通の要衝の地に篠の丸城を築き、長男顕則をおいたとあります。また、篠の丸城は展示されているレーザー測量地形図を見ますと、北西側の斜面に上部から山裾に向かって竖堀が見られますが、相当堅固な城であったと想像できます。

### ② 長水城

長水城については文和年間（一三五二～一三五六）円心の三男則祐が要害の地である長水山に築城し、城主に甥の師頼（広瀬氏の祖）をおいたとされています。

しかし篠の丸城、長水城とも約一〇〇年後の嘉吉元年（一四四一）赤松満祐が將軍義教を殺害した嘉吉の乱により山名氏に攻められ、赤松一族の滅亡とともに落城しました。その後山名氏の支配下にあ

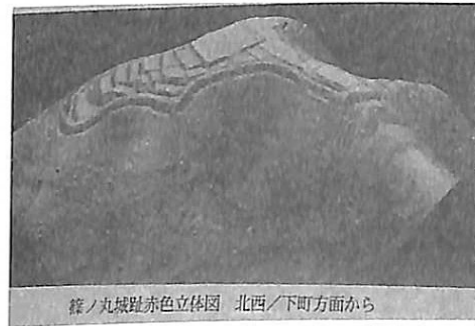


写真2 篠の丸城レーザー地形図



写真1 篠の丸城発掘調査

りましたが、約二〇年後の応仁元年（一四六七）からの応仁の乱で、赤松氏の播磨国奪回がなり、この時に篠の丸城、長水城ともに赤松氏によって、修築されたとみられます。長水城には宇野氏が入り、篠の丸城はその支城になりました。その後宇野氏が続きましたが、それからまた約一〇〇年後の天正八年（一五八〇）織田信長の中国攻めの命により、羽柴秀吉に攻められ両城ともに落城しました。

その時の城主は宇野政頼・祐清父子であり、平時は五十波の構の居館に居ましたが、羽柴秀吉勢に攻められたときは、山頂の長水城へ逃げ登りました。落城の時、政頼ら一行は城を抜け出し、美作国大原の新免宗貫を頼ろうと千種の大森まで逃げましたが追っ手に阻まれ、運拙く大森で主従ともども自刃し果てたと言うことです。現在大森の地に一行の供養塔が建てられています。

### ③ 岸田出土の銅銭と壺

昭和三十五年（一九六〇）十月、旧神河中学校講堂前の道路で簡易水道の工事中、約五〇cmの地下から、銅銭が大量に入った壺が出土しました。重量にして約九貫（三七・五kg）ありました。（十貫文Ⅱ米約一〇石相当）。

一体誰がいつ頃何のために埋めたのだろうかと言うことですが、『山崎町史』や平成六年（一九九四）に発行された調査報告書『山崎町の中世・近世銭貨』にはそれらのことが詳しく記載されています。

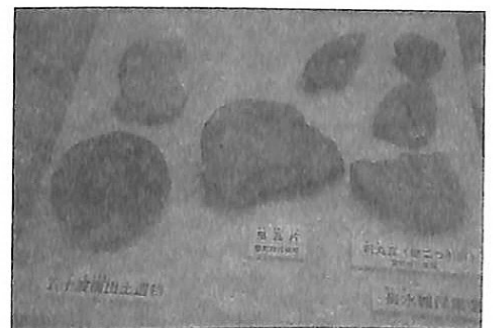


写真3 長水城及び五十波構跡出土遺物

その要点を列挙しますと、

\*出土銅銭の種類―全部中国銭、約六〇種類、最古のもの（唐代の開元通宝（六二一年初鑄）・最新のもの（明代、弘治通宝（一四八八年初鑄）で室町時代広く流通、約八六〇年間にわたる中国貨幣がありました。

\*我が国の貨幣

我が国の貨幣はというと、中国の貨幣制にならって和銅元年（七〇八）に和同開珎を、その後も奈良・平安時代にも続いて発行されたがあまり流通せず乾元大宝を最後に打ち切られました。

平安末期以来商業の発達によって貨幣が必要になり、平清盛や、室町時代の足利義満により中国貨幣が大量に輸入され、国内で流通するようになりました。莊園の年貢も銭納化が進んできたといわれます。

\*埋蔵銭について

前述のとおり、昭和三十五年（一九六〇）山崎町岸田の工事現場で大量の古銭が詰まった備前焼の壺が発見されました。そのほとんどが中国からの輸入銭で約六〇種類であったと言うことです。

この中国銭を埋めた時代は十五〜十六世紀頃、つまり赤松満祐が將軍足利義教を殺害した嘉吉の乱（一四四一）後から慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦のころの社会不安のころと考えられ、調査報告書による



写真4 出土した壺と中国銭

と一番可能性があるのはおよそ五〇〇年前の十六世紀初頭ではないかとされています。

埋蔵銭の量は重量にして約九貫（三七、五kg）あることから総数は約九〇〇枚と推定されるとあり、現代の価値で数一〇〜一〇〇万円程度ということですが。

また、所有者もしくは埋めた人物については、岸田周辺の富裕な名主（みょうしゅ）層（有力農民）であろうと考えられています。そしてまた、埋めた理由は、当時の社会は火災や盗難から財産を土の中に隠す行為が広く普及しており、この銭も保管を目的に埋められたのではないかとことです。

この埋蔵銭からもうひとつ考えられることは、物納から銭納へと変わっていった歴史についてですが、かつては物物交換であり、年貢も物納であったものが、いつのころから埋蔵銭に見られるように、貨幣経済へと変わっていったのでしょう。これは、鎌倉時代中頃から渡来銭の宋銭が流通し始め、これまで現物納であった莊園の年貢も次第に銭納に変わっていきます。特に室町時代、三代將軍義満が金閣寺を築いたのもこのころですが、その後義満は中国との勘合貿易で大量の中国銭を輸入したことがあげられます。そしてまた、銭納のために、現地での換金が必要であり商業活動が活発になって、市場も出来たといわれています。

現在の山崎町市場（高下市場）一宮町東市場、波賀町今市は、いずれも中世に市場が開かれた地であると山崎町史に記されています。歴史郷土館には以上のような展示品があり、中世の室町時代の歴史を垣間見ることが出来ます。



# 最上山公園のもみじの魅力と歴史

竹内 克司

最上山公園もみじ祭りはここ十年の間に県内外に知れ渡り、来客者が年々増えている。昨年十一月二十三日（土）のイベント初日にインター付近から国道二九号線にかけ大渋滞をもたらしたほどである。県内の有数のもみじの名所として多くの人を魅了する最上山もみじ公園が形成された歴史には、大きな二つの転機があったことを当時の時代背景とともに探ってみたい。

## 大正から昭和の山崎町

大正から昭和初期にかけて最上山のお寺と埴尾神社（通称荒神さん）周辺が桜の名所として郡内外から多くの来訪者が訪れるようになった。折しも当時は民謡づくりが全国的にブームになり、商工会や地元有志によって山崎町にふさわしい民謡づくりが計画され、人気民謡作家野口雨情と作曲家中山晋平が昭和七年初秋に山崎町に招かれた。一週間の滞在で、「山崎小唄」や「宍粟民謡」が生まれた。山崎小唄には、山崎のシンボルとして、「あれは山崎 最上山 鐘が鳴ります、日に三度 日に三度」このくだりが七小節の歌詞に何度も繰り返し唄われ、宍粟郡と山崎町が世にアピールされたのである。そこで生まれた民謡の中で「もみじ」が歌詞の中に現れたのがただ一つある。野口雨情作詞の「篠の丸の四季」である。「秋の紅葉は篠の丸 織るやあかねの唐錦 色とりどりにうつくしく・・・」

とある。ただ、雨情は初秋に来たために、その光景は見えていないが、おそらく近くの人たちに聞いて篠の丸のもみじを唐錦に例えてその美しさを表現したのだろう。そうして、その三年後に大きな転機が訪れたのである。

## 篠の丸公園の造成と鑑賞樹木の植樹

一つは、昭和十年（一九三五）二月のことである。山崎町出身で東京都在住の木村説二氏の母が亡くなられ、冥福を祈るため郷土山崎に何か記念事業を残したい旨を竹馬の友前野佐吉氏に相談された。前野氏は日ごろの思いであった町の背後の山林を町民の健康と外客誘致の公園にする構想を木村氏に提案され、その実現が一任された。その意向はすぐさま時の町長である前野修二氏に告げられ全面的協力が得られることになった。山林の大半が町有林であったものの、



篠の丸公園千畳敷 郷土写真版「宍粟郡」より

私有地の買収が難航し、時間をかけて交渉にあたった。そうして二年間公園造成（道路建設、植樹、休憩所等の設置）が進められた。公園は篠の丸公園と名付けられ、篠の丸城址（通称一本松）から東南に延びる山麓をエリアとする。これは山崎の地名の元になった地形である。そこに植えられた樹木は、「鑑賞樹木」という名称で、楓六五〇

本、桜二一八本、ハゼ七〇本、ツツジ一二〇〇本を植えたのである。この楓の種類については、野村楓二〇〇本、一行寺楓一〇〇本、山楓一〇〇本、楓二五〇本。一本松とその参道、遊歩道、そして三つの休息所周辺に植えられた。当時の写真や絵葉書を見れば、杉やヒノキ等の人工林はなく、自生の松林にもみじ、桜、つつじなどの目で見て楽しむ鑑賞樹をとり入れている。

そのあと、四十年の月日が流れ、昭和五十一年（一九七六）町の事業としてお寺の上の見晴らしのよい尼ヶ鼻という場所に洋風の展望台を建て、遊具が一本松頂上、千畳敷、百畳敷に設置された。

### 最上山公園の整備ともみじの植樹

次に大きな事業としてあげられるのが平成元年（一九八九）のふるさと創生一億円事業である。バブル景気の昭和から平成のさなか、国より支給された用途不問の交付金一億円の記憶は三十年を経てなお記憶に新しい。

当時の安井淳三町長は一億円の用途について町民にアンケート調査をして、最終的に七、八千万を公園整備事業に、残りは特産物の研究開発に費やしたと記憶している。後に聞いた話では、最終的に最上山の植樹に「もみじ」か「桜」のどちらか二つに絞られ、もみじが地質に合っているとの判断で決まったと聞いている。

この時、篠の丸公園を、最上山公園と名を変え、公園を拡張整備し、もみじの植樹によって公園内のもみじは三〇〇〇本のもみじと四〇〇〇本の世界のカエデを有する紅葉の名所が生まれた。

取材でわかったことだが、平成二年（一九九〇）の大阪花博で取

り寄せた外来種のモミジの種が山崎高校林業科で五年間育苗され、もみじ山に植樹されている。もみじの植樹への関係者の思いや育苗に関わった高校生の努力があったことも付け加えたい。

### 「篠の丸」が「一本松」、「篠の丸公園」が「最上山公園」に

江戸時代後期、天保十三年（一八四二）の市中分間絵図には、篠の丸の位置に松の絵が描かれている。篠の丸の頂上には少なくとも天保の時代より山麓から大きな松が見え、一本松と呼ばれるようになったのだろう。

ふるさと創生の公園化の時に、篠の丸公園から最上山公園と名を変えたとすでに述べたが、本来は、最上山（公園）といっていたの



市中分間絵図部分 天保13年（1842）

は、現在の展望台のある所（尼ヶ鼻）の下に現在のお寺が建てられた時、その周辺をお寺の名称、「最上稲荷山教王院」からそう呼ばれるようになった。以来、「篠の丸公園」という呼び名はいつしか忘れ去られていったのである。



篠の丸公園の石柱（お寺近くの遊歩道）

ふるさと創生の植樹のとき、もみじ山はもみじ以外に子どもに人気のクワガタやカブトムシのいるクヌギやコナラがあった。その他ヒノキ・杉、ふもとには竹林が混在していた。その自然豊かな山が、一部を残したただけでほとんど伐採され、その後にもみじが植えられたのである。同時に弁天池の水辺整備も加わり、幼少期の原風景が壊されていくようであり、当時はその公園化を手放して喜ばなかった。

そうして十年二十年の歳月が流れ、いつしかもみじ山が目を引くようになっていった。そのころ山崎町の女性グループによる「住みよい町づくりの会」がそのもみじの美しさを見てほしいと、平成十

三年十一月二十六日に「第一回やまさきもみじ祭り」を開催し、来客者へ甘酒によるおもてなしを始めた。そうして毎年増加する来客者に対応するため宍粟市は、公園のもみじ管理、トイレ、ライトアップなど諸設備の充実を進めた。同時にもみじ祭りを成功させようと商工会・地元商店街や自治会の協力体制が徐々に浸透し、三年前には寄付を募りもみじ山の北東斜面に植樹がなされた。このようにもみじ山を観光資源として守り育てようという気運が住民の間に深まっていった。

#### 貴重な観光資源を次世代に

もう一度振り返ると、昭和初期、先人の奇特な寄付から始まった町民の健康と外客誘致の公園化、そしてふるさと創生事業による公園整備拡張と、もみじの植樹。この二つの事業がうまく重なりあった。ただ忘れてはならないのはその折々に加わった地域住民の熱意、協力があって生まれたものである。辛辣に言えば、戦後歴史的、伝統的な物が失われていくなかで、行政と住民が一つになって守り育てた数少ない成功事例なのかも知れない。

今後はアクセスしやすい道路・駐車場の整備、そして公園周辺の再開発も視野に入れた取り組みが次世代に引継がれることを期待したい。それこそが、関西一いや日本一の紅葉の名所への夢の実現だと思ふからである。

参考：『篠の丸公園と妙見堂』、『むかし懐かしい山崎の民謡を唄い語り継ぐ』、聞き取り調査等



# 利便性の裏に潜むもの・・・

伊藤 一郎

日本の歴史の中で激動の時代と私が思うのは、第一に六世紀から七世紀にかけて中国大陸の隋との国交により冠位十二階を制度化し、今の天皇家が制度化された時です。第二は十六世紀から十七世紀の鉄砲の伝来から戦国時代、そして織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の時代。第三は十九世紀から二十一世紀にかけて、徳川幕府が崩壊し、明治・大正・昭和・平成・令和の時代です。

私の生れは昭和二十五年（一九五〇）、子どもの頃の思い出は、「お竈さん」で米を炊いて、燃え残りの薪を鉄瓶に入れて消し炭を作り、これを使って「七輪」で秋刀魚を焼いたこと。その後、熱源はプロパンガスに変わり、今では電磁調理器になっています。また、家の近くの東和通りには、神姫バスが通り、近くにあった友澤医院の先生の乗用車が動けば、近所の子どもが珍しがって見学したものです。今では、我が家の大人四人がそれぞれ自動車を持ち乗り回しています。

出水町には「山映館」という映画館があつて大変賑わいを見せていましたが、今ではテレビジョンが各家庭に何台もあります。戦後十年位までの強い印象は、真白な服を着た人が箱を抱えて家の前に立つ姿です。彼らは、傷痍軍人でした。私の母は朝鮮半島からの引揚者なので、気の毒がつてよく献金していました。父も母も教師でしたが、戦後間もなくは教師の給料が土木作業員の給金一日分程の

時代があり、農家の親戚のない母は、食料品店を営業して家族を養いました。店には手回し電話があり、その後プッシュホン電話になり、ファックス電話になりました。今では携帯電話・スマホです。スマホに熱心に向き合う若者を見ると、なぜか私は将来に不安を感じるのです。

私の住む出水町通りの東に二本の小川が通っています。今、西側の小川はドブ川で生物は見られません。しかし父の子どもの頃はきれいでうなぎや魚がたくさんいたとのこと。私のこどもの頃東側の小川にはホタルもたくさんいて、私はうなぎ・ふな・ずかにやなぎばえなどを取って遊んでいました。周りにはたくさんのお赤んぼも飛んでいました。しかし、昭和四十年代には、家庭排水により小川が汚濁して、生物は死に絶えました。生物の死はすなわち人間の死に繋がると思い議会でも家庭排水の処理、つまり下水道事業を早くせねばと訴えました。

昭和六十三年（一九八八）に「揖保川の自然を守る議員懇話会」を結成し、水生生物調査を行いました。菅野川二か所・伊沢川二か所・揖保川五か所を選び、昭和六十三年から平成十六年（二〇〇四）にかけて十七回行っています。調査は夏休み中で、小中学校の理科の先生と生徒、県職員、山崎植物同好会のメンバーで行いました。

宍粟市の下水道整備は平成三年（一九九一）から平成十五年（二〇〇三）の間に出来ています。丁度水生生物調査と下水道整備の時期が重なっています。その一ヶ所である山崎町田井の井ヶ瀬橋下流地点の調査結果を見ると、下水道整備の進捗とともに水生生物の種類と数が減少しています。私達の予測は大きく外れたのです。

昨年相生市のチリメン工場を視察し、播磨灘では全くチリメンが捕れなくなつたと聞きました。また昨年の九月には、揖保川漁業組合の鮎種苗センターを視察しました。組合長の説明の中で「下水道処理場の下流域では、鮎の食する石垢がまったく付かない」と言われた事が気になっています。原因は下水道処理による塩素ではないかと思ひます。自然の生態系を守るためには出来る限り塩素の代わりにオゾン処理をすべきです。

もつと言へば、いま地球温暖化を抑止しようと、スウェーデンの若者グレタさんが「私たちが安心して住める将来を保障してください」と強く訴えています。この言葉に耳を塞ぐようではダメです。現在、先進国に住む私たちの生活衛生面の向上は昔とは比較にならないものがあります。よかれと進めた下水道事業によつて、排泄物や化学処理され、川・海の栄養が失われつつあります。その弊害があることを忘れてはならないと思ひます。

水生生物調査「田井井ヶ瀬橋の昭和六十三年（一九八八）〜平成十六年（二〇〇四）の調査」の年次別結果表は私の小論の裏付けになるものです。結果表を示すことは紙面の都合で出来ませんが、関心のある方は是非私にご連絡ください。

## 山崎町佛教会寺宝展の報告

山崎町佛教会事務局 加藤 昭彦

山崎町佛教会主催の寺宝展を令和元年五月十四日〜十六日にプレイベントとして宍粟市役所のロビーにて開催し、多くの方々に鑑賞していただきました。

引き続き十一月二十三日（土）・二十四日（日）、最上山もみじ祭りの協賛イベントに参加し、本町光泉寺さまを会場として開催、それぞれ町内の有志寺院十三ヶ寺が所蔵する佛画、佛像類、佛具、経本、古文書、瓦等を出展、多くの観光客が訪れるもみじ山の紅葉に合わせて初めての企画でしたが、盛況裡に終えることができました。

山崎町佛敎文化の振興、更には町おこしの一環としての趣旨に係者各位のご理解を賜り、とりわけ山崎郷土研究会、やまさきまち歩きガイドの会、役員の皆さまには会場設営のお手伝い、来場の方々へのガイド等大へんお世話になりました。誌面をお借りし重ねて厚くお礼申し上げます。

### 写真説明

県指定文化財の浄土真宗祖親鸞聖人の母を描いたとされる吉光女像、西光寺の開祖とされる円空像（写真2）、山崎藩主本多家寄進のお釈迦さまが入滅した時の様子を描いた涅槃図（写真3）、山崎藩主本多家寄進の阿弥陀如来を中尊とする浄土の極楽を描いた観経曼荼羅（写真4）。



写真3 釈迦涅槃図（大雲寺蔵）江戸時代



写真1 会場 本町 光泉寺

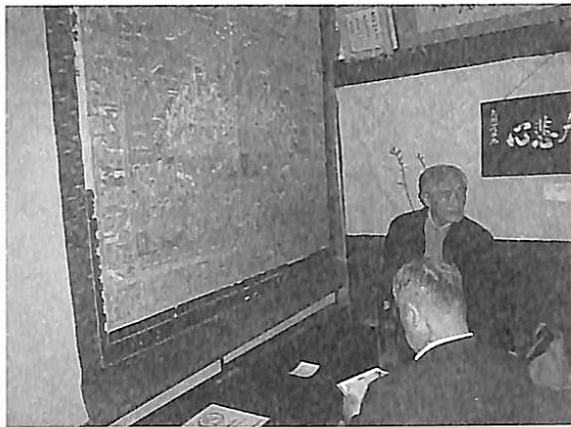


写真4 観経曼荼羅（大雲寺蔵）江戸時代

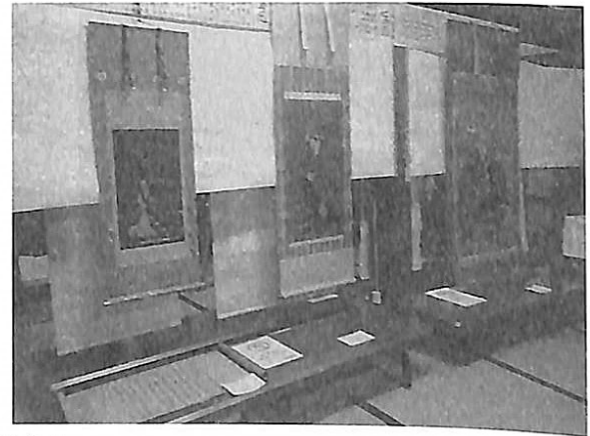


写真2 吉光女像・円空像等（西光寺蔵）県指定文化財 室町時代

山崎佛教会寺宝展のパンフレット

山崎町佛教会 寺宝展 出展一覧

作品名	所蔵寺院	作者	時代	備考
■釈迦涅槃図	大雲寺		江戸時代	山崎藩主本多宗時蔵
■観経曼荼羅	大雲寺		江戸時代	山崎藩主本多宗時蔵
■妙鉢	極楽寺		江戸時代	
■地蔵絵巻	景徳寺		江戸時代	三輪
■瓦	興隆寺		江戸初期	
■浄土三部経曼荼羅	教専寺			三輪
■諸阿闍梨	教専寺			本願寺三世阿闍梨
■釈迦遊行像	正福寺			
■学僧大思心	明徳寺			三輪
■吉光女像	西光寺		室町時代	吉光 良徳
■円空像	西光寺		室町時代	吉光良徳蔵、真達知寿 此は葛原三郎
■種彦図	西光寺			
■美人図	西光寺			三輪
■源氏物語絵巻	西光寺			
■山崎総持(初代)	光泉寺	本多忠勝(1841-1874)		権將山崎藩初代藩主
■住持要集	光泉寺		文久元(1861)年	三冊
■六字名号	光泉寺	通如上人(1416-1499)	室町時代	
■前川源公の観音り図	明徳寺		大正時代	
■羽子図	明徳寺		大正時代	
■菓子箱	明徳寺			
■地掛	明徳寺			
■女立像	明徳寺			
■源氏物語	明徳寺	香橋通八	江戸初期	
■和歌山(宗徳)の巻物	金山寺		徳政5(1717)年	山崎 山崎
■山崎前(宗徳)の巻物	金山寺			山崎 山崎
■イノシの巻物	景徳寺			山崎 山崎
■山崎山崎	景徳寺			山崎 山崎
■山崎山崎	景徳寺			山崎 山崎
■山崎山崎	景徳寺			山崎 山崎
■山崎山崎	景徳寺			山崎 山崎
■山崎山崎	景徳寺			山崎 山崎
■山崎山崎	景徳寺			山崎 山崎

最上山もみじ祭り 協賛イベント

# 山崎町佛教会 寺宝展

開催期間 11月23日(土)・24日(日)  
午前9時～午後5時

会場 光泉寺 (宗栗市山崎町山崎9-4) ☎030-127-0591

主催：山崎町佛教会  
後援：宗栗市 宗栗市教育委員会  
山崎郷主研究会、やまさまちなま歩きガイドの会



# 鳥取研修旅行記

坂本忠彦

秋も深まる令和元年（二〇一九）九月二十九日（日）に因幡国の鳥取へ行く。午前八時に旧山崎市民局跡地を出発してバスは一路鳥取に向かった。今回の研修も山崎文化協会と合同で研修をする。

鳥取は、鳥取砂丘と二十世紀ナシとしても知られ、歴史的にも古代から戦国時代、江戸時代には、播磨国と因幡国は深く結ばれ、国道二十九号線を利用していた時は、交通量が多くあったが、今は中国縦貫自動車道から中国横断自動車道姫路鳥取線で鳥取に行くのが時間的にも速く着くことから多く利用されている。

途中岡山県西粟倉村の道の駅あわくらんどで休憩する。

午前十時に鳥取市内に着き、鳥

取市国府町の因幡国一宮の宇部神社に参詣する。宇部神社は式内社で、大化四年（六四八）の創建とされ、本殿は明治三十二年（一八九九）とされる。

「延喜式」（平安時代中期に記載された）によると、式内社で名神大社とされる。

祭神は、武内宿禰命（たけうちのすくねのみこと）で、長寿の神



写真1 因幡国一宮宇部神社

様とされ、五円紙幣にも描かれている。お金に縁があり商売繁盛の神様とされ、全国から参詣される。日曜日で参拝者も多く見えていた。続いて近くの因幡国庁跡（国指定史跡）を見学する。奈良・平安時代の因幡国を治めていた役所の跡で復元されていた。因幡国庁跡を観光ガイドの説明があった。

次に岡益石堂（岡益廃寺跡）を見学する。

「謎の石堂（いしんどう）」と呼ばれている。

円柱の石塔で、二メートルを測る。中央が丸みを帯びて膨らんだ「エンタシス様式」とされる。そ

の上に台石があり、下には忍冬唐草文が描かれている。側面には一枚岩が二石あり、唐尺で高さ一メートル、厚さ四十センチを測る。

なお、壇ノ浦の戦いで平家が敗れその時に入水した安徳天皇の墓という説が地元にあるが、年代が異なる。

岡益石堂は、宮内庁の管理地である。近くには梶山古墳がある。

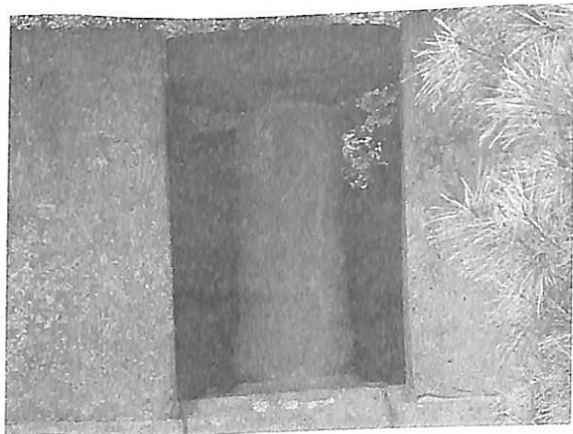


写真3 益岡石堂



写真2 因幡国庁跡

終末期の古墳で七世紀ごろとされ、昭和五十四年（一九七九）に国指定史跡にされている。彩色の魚の壁画で、切石の横穴式の八角古墳で、方形壇である。日本最古とされる。

昼食は鳥取砂丘会館で、十二時二十分から十三時二十分までである。鳥取砂丘は中国の砂漠とは比較できないが、当日は日曜日で、多くの見学者があった。

午後から砂の美術館を見学し、作品は砂の芸術で、インドのガンジーなど砂の芸術品が多くみられた。

次は鳥取城で、初代藩主は池田光仲、社殿は国指定重要文化財（史跡）で楽しみにしていたところで、鳥取城まつりが開かれて、イベントがされて多くの見学者があった。午後二時から三時頃まで鳥取城を見学した。約一時間で、因幡国と伯耆国の三十二万石の池田家の藩主がいた石積みみの城をみる。

最後の見学は、鳥取東照宮で、午後三時から四時頃まで見学する。東照宮と名が付いていることから、徳川家康の孫でつながりがあり、ゆかりの地であると考えられる。本殿には三つ葉葵の紋様がいたるところにあった。

鳥取藩主池田家の墓所は、時間の都合で今回は見学できなかったが、初代藩主の池田光仲から十一代の慶栄（よりひろ）まで歴代の



写真4 鳥取城跡



写真5 砂の美術館

藩主の墓所である。  
なお、今回見学したところは、何れも重要な地で、最も興味があり、いつか現地を訪れたいと思っていたところで、今回山崎郷土研究会の研修旅行で実現できた。



写真6 鳥取東照宮

# 兵庫県粟市山崎町金谷字博勞垣内 四百十三出土の大刀装具について

片山 昭悟

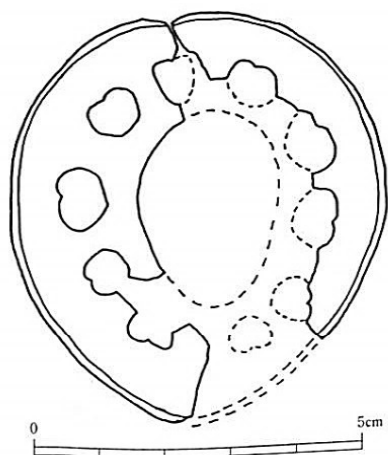
金谷字湯船口の古墳から大正六年（一九一七）に出土の瑞雲双鸞  
八花鏡はちかきょうとはほ同時期の大正十一年（一九二二）十一月一日に博勞垣  
内四百十三番地での大刀装具が出土している。

私は東京国立博物館収蔵品（第九三五一号）で、平成三年（一九  
九一）八月十六日に東京国立博物館考古課望月幹夫室長のご厚意で  
観覧させていただいた。

大刀装具残片は、柄間は銀線巻で銀線に刻目を入れたものであり、  
銀線巻装具の残存長は七・三センチ、銀線残存長五・一センチを測  
る。鐔ぼは金銅製で長径七・四センチ、飾り孔は現存窓九個のハート  
型をしているものである。鞘口さやぐちは銀板で造られている。

ハート型タイプの鐔については、関西大学『考古学資料図鑑』昭  
和四十八年（一九七三）によると、猪目透いぬめすかしで飾り孔は十窓でD類と  
分類されている。

なお、博勞垣内四百十三出土の鐔  
については、末永雅雄『日本上代の  
武器』昭和十六年（一九四一）に図  
面が紹介されている。これによると  
図四で、出土地については兵庫県粟  
郡城下村（現在の山崎町金谷）とさ



大刀装具実測図

れている。末永雅雄氏の研究によると、猪目透かしの透かし窓をも  
つ鐔は二個あるのみである。

また、泉森皎「鐔」『関西大学考古学資料図鑑』によると、博勞  
垣内四百十三番地出土の大刀装具の鐔はこれらの分類からD類の十  
窓式であり、透かし窓は、猪目透かし（ハート型）であり、きわめ  
てめずらしいものである。

大刀装具が出土した山崎町金谷字博勞垣内四百十三番地はかつて  
瓦用の粘土を採取するため削平され出土したものである。

伝承では、大刀は須恵器とともに出土したとされる。国見山の山  
麓尾根上から派生する尾根の先端部であり、この地点からは城下平  
野が一望できる。

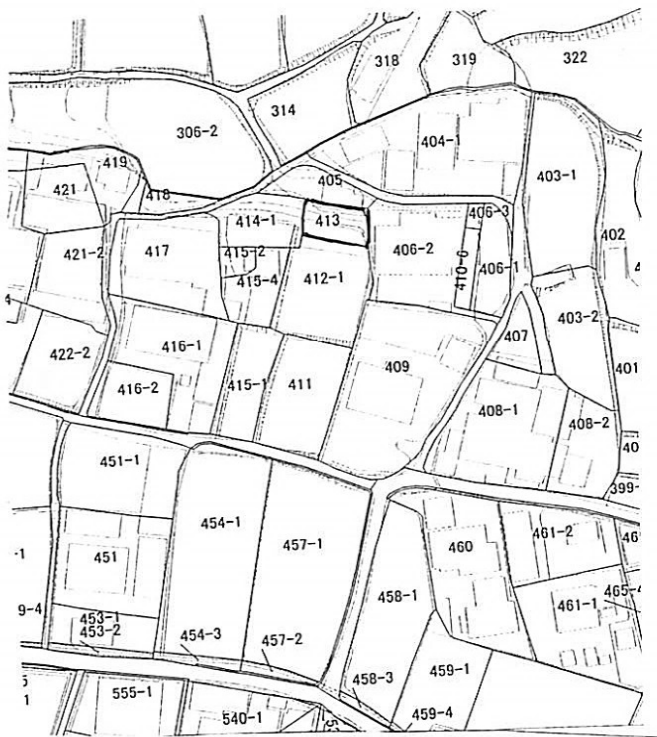
山崎町金谷出土の大刀の年代とその性格から鐔に関して刀装形式  
から六世紀のⅡ四半世紀を中心とする時期のものとする。

畿内と政治的な意図のもと密接な関係を持った地方の首長層にこ  
の種の刀が配布されたものと考えられる。このことから「播磨国風  
土記」の比治里に記載されている里長の山部比治の山部氏とも深く  
かかわりがあるものと推定される。

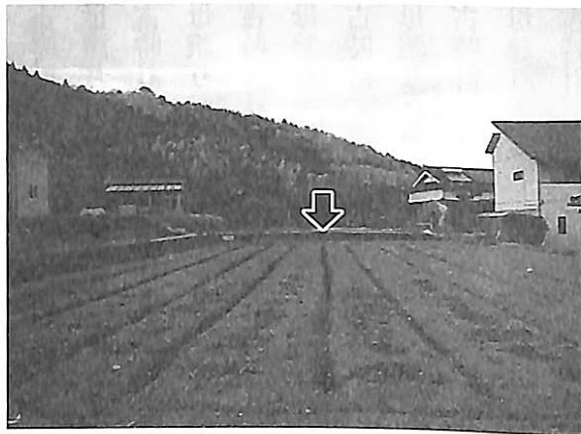
猪目透かしを金谷博勞垣内出土の鐔になぜ用いたのであるうか。  
奈良時代の鏡の瑞雲双鸞八花鏡が出土した金谷一号墳とも同地域で  
あり関連するものではないか。

今回、平成三十一年（二〇一九）三月九日の午後三時頃に大刀装  
具が出土した山崎町金谷字博勞垣内四百十三番地の現地の確認を金  
谷の片山新氏より御教示と位置図をご提供いただいた。





位置図 S=1000分の1 (50%縮小)



大刀装具出土地 南より



東より

氏より  
 大正十一年(一九二二)十一月一日に帝室博物館總長の三宅米吉  
 「左記之物件東京帝室博物館ニ御寄贈相成御厚意  
 致深謝候永ク保存本館ノ資料ニ可供候也」と書いてある。  
 (故片山巖氏所蔵資料)  
 この資料を平成三年八月十六日に東京国立博物館考古課望月幹夫  
 室長のご厚意で観覧させていただいた。大正十年一月十六日に開墾  
 中に表土下六十センチで出土したもので、宮坂九平氏と片山新太郎  
 氏と片山藤治郎氏が発見したもの。片山新太郎氏が地元の警察に届  
 けている。

市立博物館  
 左記之物件東京帝室博物館ニ御寄贈相成御厚意  
 致深謝候永ク保存本館ノ資料ニ可供候也  
 大正十一年十一月一日  
 帝室博物館總長 三宅米吉  
 片山新太郎殿  
 宮坂九平殿  
 一 大刀装具殘缺 壹括  
 柄切銀鍔巻巻 鍔金具ニシテ照又捺アリ鍔殘片  
 金銅製鞘口金銅製 鞘ニ銀金具巻アリシタルヘシ  
 刀身残片ヲ添テ檢査同穴衆郡城下村大谷金谷守  
 掃居地四百三十二番地發掘  
 計壹點

# 会員・家族の文芸

## ◎冠 句

母譲り 頑張る二文字引き継いで  
 古時計 昭和の時代に時戻し  
 母譲り 家族円満和をつくり  
 古時計 震災復興時刻み  
 母譲り 弱音を見せずやり遂げる  
 古時計 妻の形見が時刻む  
 母譲り 興味津々まなこ開け  
 古時計 短針の3待ち遠し  
 母譲り 元気な暮らし感謝する  
 古時計 年号変わり時刻む  
 母譲り この日この顔この性分  
 古時計 記憶の土間に祖母の笑み  
 母譲り 赤とんぼの唄ハミングす  
 古時計 三つの時代見つめてる  
 母譲り 鏡で気づく目鼻立ち  
 古時計 今も現役時刻む  
 母譲り 鏡に映る立ち姿  
 古時計 家族の歴史見守って  
 母譲り 餅を揉む手は我が自慢  
 古時計 店の看板誇らしげ  
 母譲り 大きな声でおしゃべりだ  
 古時計 伊賀と甲賀へ測量に

宇田 幸夫  
 宇田 幸夫  
 坂本 忠彦  
 坂本 忠彦  
 坂本 忠彦  
 実友 勉  
 実友 勉  
 実友 勉  
 嶋津 千里  
 嶋津 千里  
 嶋津 千里  
 為国真佐行  
 為国真佐行  
 為国真佐行  
 谷笹 まや  
 谷笹 まや  
 高井 怜依  
 高井 怜依  
 高井 怜依  
 西家 侑希  
 西家 侑希  
 西家 侑希  
 三木ひづる  
 三木ひづる  
 三木ひづる  
 大谷 志路  
 大谷 志路  
 大谷 志路  
 中瀬 公三  
 中瀬 公三  
 中瀬 公三

## ◎俳 句

天正の落人塚や茶花咲く  
 夕闇にオカリナ遠く日の短か  
 のんびりと牛の寝そべる夏野かな  
 赤とんぼ即かず離れず帰り道  
 温め酒啜る父親遠き日よ  
 角々の朱を置きをり紅葉かな  
 春の雪墨絵のごとき山の景  
 ゆつたりと令和見届け山眠る  
 霜晴れの畑の野菜深呼吸  
 人まばら残る紅葉の輝きて  
 出あいあり別れもありて花の下  
 菜の花や土手の野仏黄に暮れる  
 全身で抗ふ赤児原爆忌  
 大吟醸妻と二人の年忘  
 咲き誇り蝶へ止まれと藤袴  
 復元の弥生住居に秋日濃し  
 虫喰のまじる十夜の数珠を繰る  
 大根の朝の睡気を摺りおろす  
 ふる里に三戸の空家梟鳴く  
 たわい無き夢に目ざめし春の闇  
 山里より遠く雪山峡の郷  
 大山に別の貌あり雪催い

京屋 伊助  
 京屋 伊助  
 杉山美保子  
 杉山美保子  
 杉山美保子  
 高井 麗子  
 高井 麗子  
 高井 麗子  
 田中 良子  
 田中 良子  
 田中 良子  
 鳥羽チエノ  
 鳥羽チエノ  
 鳥羽チエノ  
 三浦 ゆき  
 三浦 ゆき  
 三浦 ゆき  
 里見 和樽  
 里見 和樽  
 里見 和樽  
 高井 智代  
 高井 智代  
 高井 智代  
 速水美知代  
 速水美知代  
 速水美知代  
 宗平 圭司  
 宗平 圭司  
 宗平 圭司  
 矢野登次郎  
 矢野登次郎  
 矢野登次郎





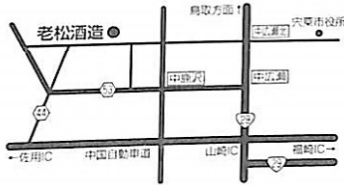
# 老松酒造有限公司

■老松ダイニング  
発酵と麹の健康ランチ  
定休日:木曜日(予約優先)

■老松販売所  
日本酒・リキュール・麹商品

老松酒蔵見学出来ます

〒671-2577  
兵庫県宍粟市山崎町山崎12  
電話0790-62-2345



まごころを伝えます。

一献献上 品質本位

地酒

山陽  
盃

確かな品質と味わい。



SANYOHAI  
山陽盃酒造株式会社  
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

一播  
献州

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218

E-mail info@sanyohai.com HP http://www.sanyohai.com

# いとう画廊

兵庫県宍粟市山崎町山崎413  
TEL (0790) 62-0371  
FAX (0790) 62-0371



パンフレット・デザイン広告  
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌  
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454  
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

外科・内科

# 山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 0790-62-0036

ほっと、ひといき

# 伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 生薬風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1  
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362  
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO  
Ueyama  
P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204  
TEL (0790) 62-8027  
FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90 〒671-2577  
TEL (0790) 62-0700(代) FAX (0790) 62-0700

E-mail:gaisyo@yasuisyoten.co.jp  
URL:http://www.yasuisyoten.co.jp/